

三浦ストレッチクラブ

「楽しい仲間と一緒に体を動かしてみませんか
女性がいつも笑顔絶やさず、素敵な毎日が過ごせますように！」

毎週金曜日 坂本コミュニティセンター

午前10時から

会費 月2000円

見学大歓迎です、お気軽にお越し下さい。

電話 046-822-5998 三浦久美子



「坂本中学校に水田が出現！！」

第一教室（特別支援教室）の生徒の皆さんによる田植えが行われ立派な水田が出来ました。秋の収穫が楽しみです。



早くもトンボが産卵に！、見学される場合は日曜など授業の妨げにならない様お願いします。

「広報さかもと」の編集に参加しませんか

坂本地区にお住まいの方ならどなたでも。記載テーマの掘り起こしや町の話などをワイワイするのが主です。面倒なことは一切ありません、参加形態も自由です。興味のある方は遠慮なく下記までメールでお問い合わせ下さい。

訂正とお詫び

横須賀スカイガーデン会の連絡先が間違っていました。
幹事 加藤 允 電話 046-827-3437 です

※同好会等の活動紹介とメンバー募集などにもこの欄をご利用下さい。(無料です)

商業広告の記載も承ります 5cm*20cm 1000円

ご意見・広告・投稿・寄稿は (fax) 827-8086

(メール) csc_taka@yahoo.co.jp お問い合わせ 823-4181 (斉藤)

「神道と神社について」に関するご意見ご感想はメールにて承ります 編集責任者 斉藤隆親 (連合総務担当)

広報さかもと

2011年 7月号

発行責任者：坂本連合町内会 会長 中 猛

今年の大六天神社の祭礼は 祭礼実行委員会で協議した結果、神社の意向を尊重して実施しないことに決定致しました。

申し合わせ事項は以下の通りです。

1. 8月7日 例大祭に代わって震災の鎮魂祀及び復興祈願祀を執り行う。
2. 御霊入れの儀を実施しない。
3. 連合渡御を実施しない。
4. 8月7日は(神)輿巡行、お囃子等の歌舞音曲を控える。
5. 申し合わせ事項以外は各町の自主的な判断に委ねる。

* 連合盆踊り大会は自家発電による節電対策を施して例年通り実施予定です。
開始時間等は変更される場合があります。

7月 7日 (木) 旧坂小の特別教室棟と体育館の利活用についての説明会開催
会場：桜小学校 (2F) 特別活動室 (上履きご持参下さい)
7月17日 (日) 大六天神社の草刈り 午前9時より (荒天の場合は中止)
7月24日 (日) 予備日

特別寄稿

「神道と神社について」

大晦日から三が日にかけて多くの人々が神社を訪れます。両手を合わせて神に祈り、絵馬に願い事を書いて奉納し、お守りや縁起ものを買って求めます。近年のパワースポット巡りのブームや楽曲『トイレの神様』の大ヒットなどにより、各地の神社を参拝する人の数は年々増えているそうです。日本サッカー協会のシンボルマークである三本足の鳥は八咫鳥（ヤタガラス）といい、それぞれの足には『智』『仁』『勇』の意味を持ち、闇世を照らす太陽として・・・つまり、困難な状況から救い導く存在として日本神話に登場します。また、文部科学省の深海観測船『しんかい』船内には船を守る船霊の神が祀られており、科学の先端をゆく宇宙衛星やロケットの打ち上げの際には宇宙センター近くの神社で成功を祈願するのだそうです。このように身近な存在である神様や神社ですが、多くの日本人は「あなたの宗教は何ですか？」と問われた時に「特にありません」とか「家に仏壇があるから仏教なのかも」と答え、「神道です」と答える人はほとんどいません。その理由は、神道を宗教と意識していないから、そして「神道とは何か」を説明できないからだと思われま

す。神道とは日本の最も古い信仰の1つで、全国に約12万ある神社には、山や岩や海などの自然神・神話に登場する神々・その土地を代々守ってきた祖霊などが御祭神として祀られています。どの神社にも1年を通じて催される行事があり、現在ではカレンダーに記されているだけのものも含め、それらの多くは農業と深く関わる神事として始まりました。特に神様の力が1粒ひとつぶに込められているお米を作ることは地域の人々が生きていく上でもっとも大切なことであり、稲作が神と共に稲を育てる神聖な労働と考えられていたからです。豊作を担う歳神様をお迎えする歳旦祭(正月)・田植え前に身を清める春の節分祭(立春)・五穀の豊穰と国の繁栄を祈る祈年祭(2月 17 日)・お稲荷様に豊作を祈る初午・雨乞いを行う端午の節句(立夏)・疫病を鎮め半年間の穢れを祓う夏越しの大祓(6月末日)・作物の収穫前に身を清める秋の節分祭(立秋)と、作物の成長に合わせて祓い清め豊作を祈願しました。そして収穫した作物を神社に奉納し神様の力添えに感謝をする新嘗祭(勤労を尊び感謝をすることから勤労感謝の日:11 月 23 日)では、神様を輿に乗せ村の隅々までお連れして多くの恵みを下さったことへの感謝を表し共に喜び祝いました。これがお神輿の始まりで、お神輿を担ぐことを神幸祭(しんこうさい)といいます。最後に1年の罪穢れを祓う年越しの大祓(大晦日)をもって年間の神事が終わります。また、これらの神事とは別に各神社の御祭神に縁故のある日や神社の由緒に関わる日を例大祭とし、神輿渡御を行います。今日では人生通過儀礼ともよばれるお宮参り・七五三・成人式も、神社に詣で「氏神様のお子として守られ健やかに成長しますように」と祈り成長を報告するための儀式であり、戸籍がなかった時代に氏子として地域社会に認められるためにも必要なことでした。

このように神事は昔から私たちの生活に深く結びつき伝統行事として今も受け継がれています。しかし、神道が宗教と意識されていないのはなぜでしょうか？それは、神道には神の戒律(宗教上の法や規制)や教典が存在しないからです。人は神から生まれたものであり、その心には生まれながらに神の心が宿っている。内なる神の心に問いながら生きれば正しい道から外れることはないので戒律は必要ないと考えられていたからです。悪いことやずるいことをした人を『汚い』と表現するのは神の心が穢れてしまった意味で、祓い清めることで再び美しい心に戻るとされました。『万物の命を尊び、自然の恵みに感謝することを忘れずに。誰もが豊かに幸せに暮らせるよう、常にまわりを気遣いながら生きる。』とする神道の理念は、親から子へ子から孫へと、その生き方や日常生活のあり方を通して自然に伝えられていくと信じていたからです。今も日常的に用いる言葉を例にあげると・・・食事を前にして「いただきます」と言うのは、自分が生きていくために他の生命をいただくことへの感謝の表れであり、「ご馳走さま」は食事に携わった全ての人たち(お百姓さん・漁師さんら生産者から食事を作り提供してくれた人に至るまで)を思い、有り難うと心からの感謝の気持ちを表したもののなのです。

神道では先祖の御霊(みたま)を敬い祀ることも大切であるとしています。人は神から生まれ神の心に添って生き、死後は神の国へ帰って氏神の1人として子々孫々に至るまで見守り続けてくれるものだと考えられていたからです。これを祖霊信仰と言います。現在のお盆(旧暦7月 15 日頃)は江戸時代に仏教の盂蘭盆(先祖供養)と習合され定着したものです。近年では、インターネットを利用したお墓参りやお墓参り代行業などもあるそうですが、これらはニーズがあるからこそ成り立っている仕事なわけです。つまり見方を変えれば、今も日本人はどんなに忙しくても先祖を敬う気持ちを忘れずに持ち続けているということです。

神道の思想をまとめると次のようになります。

人は生まれながらに神の心(=良心)を持っており、良心に従って考え・行動することで正しい生き方ができる。そして、人とひとが互いに協力し合い助け合っていくことで、皆が幸せに暮らせる豊かな国をつくることができる。たとえ時代が移ろい生活環境が変わっていったとしても、国が栄え皆が幸せであることが最も喜ばしいことである。しかし、私たちが生きていくためには多くの動植物の命を頂かなくてはならないのだから、命に対する感謝の気持ちを忘れることなく、恵を与えてくださる自然を慈しみ育て守っていかなくてはならない。そして、この日本という国をつくり守り続けてくださったご先祖様たちへの感謝を忘れず、敬う気持ちを持ち続けていかなくてはならない。

つまり、神道とは古代の自然信仰・祖霊信仰を受け継ぐかたちでつくられた『人が幸せに生きる』ための宗教であり、人としての生き方を教えてくれる、優しく愛情に満ちた思想なのです。

大六天神社神主 小野田 宝子

東日本大震災では、多くの方々が被災され多くの尊い命が失なわれました。

今なお続く余震の中で、被災者の方々は不安な悲しい思いをしておられます。

彼らが一日も早く幸せな日々を取り戻せるように祈り、亡くなった方々の御霊をお祀りするために、大六天神社では8月7日(日)に復興祈願祀と鎮魂祀を執り行いたいと思っております。

シリーズふるさと寄稿 その1

「戦前の坂本」

私は先の終戦の年、昭和20年は坂本国民学校の6年生だった。元一丁目の伊藤会長は同級生である。併し、終戦日の2ヶ月前に、米軍の空襲激化のため、縁故疎開(集団疎開と云って学校ごとに3年生以上が相模原のお寺に分宿するものもあった)で母の実家である山形の天童市へ移住したため、残念ながら卒業生にはなっていない。そして住まいはと云うと「ちこくざか」を少し登った右手にある細い道を登り切った山のテッペンにあった。住所は不入斗119番である。そこからは眼下に重砲兵連隊が、左手下には当時衛戍病院と称した陸軍病院(今のはまゆう公園)があり、白衣を着た兵隊さんが、東屋のある庭を散策しているのが毎日眺められた。又、左手遠方には千葉の鋸山(えいじま)が一望に見渡せた。その頃は子供だったので我が家までの山登りはそれほど大変だとは思わなかったが、真冬銭湯に行ったときばかりは寒さで震えあがって帰ったことを鮮明に覚えている。後に聞いたことだが、不入斗中から出た火事で山のテッペンまで燃えてしまったとのことである。今の桜小、坂中、聖佳幼稚園、入中は重砲兵連隊のあったところだ。桜小の煉瓦の校門は連隊当時のままだ。子供の頃見た門はもう少し広かったような気がする。たまに大佐の連隊長がサイドカーに乗り、兵隊達が隊列を組んでこの門を出入りするのをじっと見ていたものだ。その門柱と接続して部分的に残っている煉瓦塀が連隊全体をとり囲んでいた。連隊の中庭には太い桜がかなりあって、春ともなるとその花は見事なものだった。連隊の塀に沿って深いドブが掘られていて、「ちこくざか」の近辺は連隊の賄い所だった。そこから流れ出る残飯を餌にした大きなドブネズミが沢山ちよろちよろしていた。又、今の坂本交番の裏手は土手になっており、「カラタチ」が植えられていて、学校の帰り道には「カラタチ」のすき間から兵隊達がやっている乗馬の訓練をあかず覗いていたものだ。

次に坂小について述べてみよう。場所は現在の所で変わっていないが、階段(もう少し右へ寄っていたように思うのだが)を登り、校門を入るとすぐ右手に神社のような奉安殿(天皇、皇后の写真と教育勅語が納められていた)と二宮金次郎の銅像が立っていて、運動場が広がっていた。校舎は裏手の崖ぎりに建っていた。又、校舎の中央部には大きく突き出たバルコニーがあり、そこが入口になっていた。ちょっとユニークな校舎だったような気がする。はっきり記憶にないが生徒数は1000人位居たこともあると聞いている。終戦間際のことと思われるが、校舎裏の崖を一人の朝鮮人がツルハシをふるって防空壕を掘っていた。(恐らく強制的に連れてこられたものと思われるが?)子供心に「可哀想だな」と思って見ていたのを何故か覚えている。以上が「戦前の坂本」についての断片である。もし記憶違いがあったらお許し頂きたい。

坂本台団地自治会

増子 武教